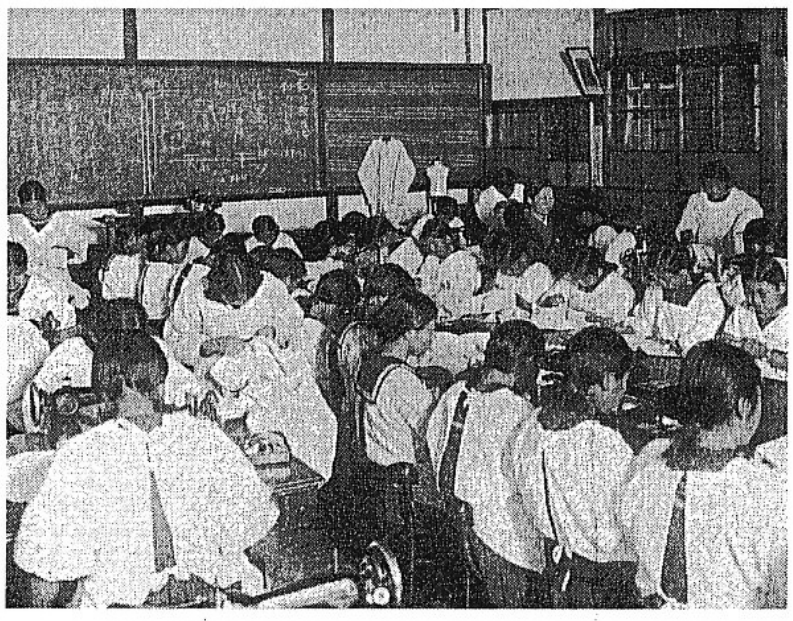
女性の地位向上 創立者の考え胸に刻み

誠実な生き方知る　戦中も自由な校風

若草山を仰ぎ、佐保川の流れる奈良市法蓮町に、奈良育英高校はある。私立育英女学校、奈良育英高等女学校を前身とする。女子の高等教育に関心が高まりつつあった1916（大正5）年、藤井高蔵と妻のショウ＝写真＝が創立した。

ショウは病死した夫の遺志を継いで28（昭和3）年、校長に就いた。「この学校に学ぶ女性を真の人間として、神にささげること、このためには、どんな苦難が襲って来ても、人の誤解があっても、喜びにこそなれ、苦にならぬ私になりました」との言葉を残している。

今なお彼女を慕う卒業生は多い。



1938（昭和13）年の裁縫授業＝奈良育英学園70周年記念誌から

樫尾百合子(82)＝写真、奈良市あやめ池南8丁目、41年卒＝は、ショウとの出会いが「人生を変えた」という。

幼いころから体が弱く、小学校は休みがち。育英には1年遅れで入った。入試も受けられなかったが、事情をくんだショウに入学を許された。

「包み込むような人柄だった。強い愛情を感じた」

年下の同級生の手助けや励ましもあり、次第に元気に。卒業後は「先生みたいになりたい」と奈良女子高等師範学校（現・奈良女子大）に進んだ。念願かなって教師となり、69歳まで大阪の公立中学や私立高校で数学を教えた。

「先生は母親か、それ以上の存在。もし出会わなければ早死にしていたかも」

玉井好子(76)＝写真、奈良市大森町、45年卒＝は入学式でショウの姿に感激した。和服をまとい、太い眉にきりりとした口元。意志が強そうで、颯爽と見えた。

男尊女卑の風潮のなか、「女としてしっかりせねば」との思いを心に刻んだ。後に上級生から、先生が女性に選挙権が無いことを嘆いていたと聞いた。常に女性の権利、社会的地位の向上を考えていたという。

校門右手には木造の講堂が残り、女学校時代をしのばせる。ショウが校長になった年、大阪・曽根崎小学校の講堂を買って移築した。生徒たちは、顔が映り込むほど講堂の床を磨き込んだ。

ショウのめい近藤卓子(76)＝奈良市法蓮町、44年卒＝は「床にはみんなの汗がしみこんでいる。建物にはとても愛着があります」と話す。

近藤の姉3人も高女卒。長女の中山和子(83)は38年、次女の浅野幸子(81)は40年、三女の山本節子(78)は43年の卒業だ。

左から近藤卓子さん、山本節子さん、的場良子さん＝奈良市東向中町で

節子の同級生的場良子(78)＝奈良市杉ケ町＝は近鉄奈良駅近くで喫茶店「銀杏や」を営む。「育英で学べたのは一生の宝です」と話す。

在学前後の約10年で、兄4人と母親を次々に病気で亡くした。自分は右目の病気で1年間休学した。

朝7時から始業前に「修養会」があり、教師が約1時間、聖書の教えなどを語った。話は釈迦や孔子ら世界の聖人にも広がった。「不幸なことも必然があって身に起こる。それを受け止め、誠実に生きることの大切さを知った」という。

生徒には県南部の遠隔地の出身者も少なくなかった。そのために寄宿舎があった。

室生村（当時東里村）出身の武野光子(74)＝写真、旧姓竹川、奈良市柳生下町、48年卒＝は、七つ上の姉中岡長子(81)＝41年卒＝の勧めで入学し、寄宿舎に入った。

当初は親元を離れるのが寂しかった。しかし教師や上級生らが親身に接してくれ、寮生活にすぐに慣れた。

戦争の真っただ中、天理市の柳本飛行場に勤労奉仕へ出かけた。拡張のため、食糧不足にもかかわらず青々と成長した麦や空豆の畑をつぶした。整地のためにローラーを引っ張るかけ声は「米英撃滅」だった。

それでも自由な校風は健在だった。音楽では従来通り外国の曲も歌った。英語は選択制になったが、「敵国語として授業が中断したのは、確か終戦前の数カ月間。先生方の教育理念がしっかりしていたからこそでしょう」。（敬称略）

奈良育英高校の歩み

【奈良育英高等女学校】1916年　奈良市花芝町に「私立育英女学校」創立。初の新入生は17人▽23年4月　奈良育英高等女学校を設立。翌月、新校舎が現在の同市法蓮町に完成して移転。従来の育英女学校は「奈良女子高等裁縫学校」（後に「奈良育英裁縫女学校」）と改称▽28年　大阪・曽根崎小学校の講堂を移築▽41年　体育館が落成

【奈良育英高校】47年　学制改革により、新制の奈良育英中学（男女共学）を併設▽48年　奈良育英高校（同）が開校し、中高一貫教育に▽50年　新校舎落成▽56年　幼稚園に続き、小学校が開校▽60年　プールが完成▽66年　創立50周年で6日間にわたり記念行事▽72年　新体育館兼講堂が完成▽83年　育英西中学・高校（女子）が開校